

初対面会話で求められること

—日本語母語話者・英語母語話者へのインタビューを比較して—

What is Required in the First Encounter Conversation?: Through Interviews to Japanese Native Speakers and English Native Speakers

重光由加
SHIGEMITSU Yuka



初対面会話、男性会話、日英比較

Key words: First encounter conversation, male conversation, A comparison of English and Japanese

Abstract

This research note reports a comparison of abstract images of the first encounter conversations for English speakers and Japanese speakers. The data is based on the follow up interviews which were collected after recording each experimental mono-cultural conversation of three males. This report compiles the responses from 25 interviewees in the UK, 11 interviewees in the USA, 15 interviewees in Australia and 25 interviewees in Japan. All interviewees were male. The result shows that Native English speakers have a core common perspective of conversation that is very different from Japanese speakers in the socio-cultural norms of taking turns, goals of conversation, and topics suitable for first encounter conversation and the way how they impress other participants in a conversation. The differences therein may hinder effective English speaking ability which does not create negative effects on interpersonal relationships.

1. はじめに

本稿では、日本語母語話者と英語母語話者が会話をどのようにとらえているかを報告する。筆者は、男性初対面会話の日英比較の分析を行っているが（津田他 2013、津田 印刷中）、本稿では、その分析用の会話データの収録時に補助資料として録音したフォローアップ・インタビューの回答に焦点をあてる。インタビューは、共同研究の主要な部分ではなかったため、調査方法に不十分な点がある。しかし、日本語母語話者と英語母語話者が会話に対して異なる認識があるという傾向が見られ、この異なりから得られる情報は今後の研究への示唆を含むものと考えた。本稿では、今後の談話分析の方向性や、語学教育への応用を視野に入れた提案を行いたい。

2. インタビューの方法

本研究のインタビューは、平成15年度・16年度科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号15520379「日本人が話す英語に見られる対人関係構築・維持上の問題点の解明」（研究代表者 堀 素子）と平成22年度・23年度・24年度科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号22520595）「国際語としての英語の語用指標解明と英語教育への応用—英語会話ができる日本人の育成」（研究代表者 津田早苗）が共有している会話データに伴うフォローアップ・インタビューの記録を用いる。

回答者は全員男性で、インタビューの直前に、30分間の3人の初対面会話に参加している。初対面会話の様子はビデオカメラとICレコーダで記録されている。上記の科研究は、男性ビジネスマンの英語に対する不安感をきっかけとしており、また、分析の際の因子を減らすため、被験者を男性に限っている。

会話の収録は、日本語の会話は日本で、英語の会話はInner Circleの英語、すなわちイギリス、アメリカ、オーストラリアで行った。現地で会話を収録した理由は、他の文化（滞在先の文化）の影響をあまり受けたことがない母語話者の言語行動を記録するためである。2014年9月現在、80本（計約40時間）の会話データがある。本稿では、それぞれの会話収録のあと、すべての会話参加者に対して5分ほど行ったフォローアップ・インタビューを資料とする。会話データには、同文化話者同士と異文化話者同士の会話があるが、本稿では同文化話者同士の会話に参加した被験者の回答のみをとりあげる。

本稿でのインタビュー対象者は、英語母語話者会話参加者としてイギリス人25人、アメリカ人11人、オーストラリア人15人、日本語母語話者会話として日本人25人である。参加者は22歳以上の男性で、3代以上前から当該国に暮らしていることを条件として募集した。したがって、最近移民として移住してきた者は含まれていない。実際のインタビュー回答者の年齢は20代から40代である。参加者は、大学院生が多いが、社会人は一般企業社員、IT関係の専門家、教員、弁護士、アーティスト、造園業、会計士、作家、俳優、休職中など多岐にわたる。インタビュー

は調査者と回答者の1対1で行った。調査者は6人おり、40代から60代の日本人女性である。

このフォローアップ・インタビューは、当初から談話分析の補助的な資料として考えられており、厳密な計画に基づいて行われていない。調査者間で共有していた質問項目は、参加者に対して会話はうまくいったか、楽しかったか、相手に好感を持たせたかなどの確認や感想を5分ほど述べてもらう程度であった。データ収録を重ねるに連れ、会話の相手がどのような人だったか、会話の中でやりにくいことがあったかどうか、普段の会話と何か異なる点はあったかどうか、初対面の人との会話で心がけることは何かなど質問の文言がより具体的になったり、調査者それぞれの調査対象に関するものが付け加えられたりすることもあった。また、どの質問から尋ねるかという順番も厳密には取り決められてはいなかった。

また、回答が自由回答となるため、同じ質問をしても短い回答しかしない回答者や、かなり長く述べる回答者もいた。また、回答の中から気になった部分をより深く尋ねたり、録音に立ち会った調査者が会話の中で気になった箇所を質問する場合もあったので、回答にばらつきがある。

このような背景から、本稿でとりあげる結果は、データとして不十分な部分はあるが、回答が蓄積されていくうちに、英語母語話者と日本語母語話者の間に会話に対する意識の異なる傾向が見え、今後の研究に重要な示唆を与えるのに有効な知見を示していると考えられる。

3. 分析の方法

フォローアップ・インタビューは、ICレコーダに録音されており、分析に際し、それを聞きながら回答の質問項目に沿って鍵となる表現を抽出した。また、回答者の表現は多岐にわたるものもあるが、1人の回答にしかでてこない項目は個人特有のものである可能性もあるので除外し、2人以上があげたキーワードだけを表にまとめた。たとえば、初対面の会話でどのようなことを心がけるかとの問いかけに対し、「知的であるように見せたい」「知的でありたい」という回答を2人から得た場合は、「知的に見せたい」というキーワードが二人から得られたと数えた。またインタビュー自体が自然会話であり、話が前後することがあったり、複数の質問の回答がまとめて回答されたりすることもある。そのため、回答の中に「相手の目を見るようにしながら、あいづちもいれた」という2種類の言語行動が含まれた場合は、「相手の目を見る」「あいづちを入れる」を異なるキーワードとしてそれぞれ記録した。また、複数の会話の参加している被験者は、複数回インタビューを受けているが、同じキーワードが複数回のインタビューの回答にみられても、1人分の1回の回答として数えた。

4. 分析結果

本稿では、「会話の中でのこころがけ」「初対面会話で話す話題」「楽しめる会話・楽しめない会話」について着目する。

4. 1. 会話の中でのこころがけ

この節では「会話の中でこころがけたこと・こころがけること」についての回答を示す。回答の中に、参加する際の態度（表1）を述べたものと、会話の方法（ターン・テイキングにかかわるものなど）（表2）を述べたものがあったので、それぞれ別の表を作成した。回答者の回答を見ると、直前の会話に言及しているものや普段の心がけを述べているものがあるが、インタビューの流れから両者を区別しにくいものがある。したがって、こころがけるものとしてすべてこの分類に入っている。

表1 会話の中でこころがけ<態度> (単位 人)

項目		英	米	豪	日
他の参加者への配慮	他の参加者の理解しようとする	0	1	0	5
	他の参加者と共通点を探す	0	1	0	3
	他の参加者のリードにまかせた	0	0	0	4
	質問をせずに話を聞く	0	0	0	4
話し手自身の態度	知的であるように見せたい (intellectual and competent)	0	2	3	0
	たくさん質問をする	0	3	1	0
	控えめ (reserved) でいたい	2	1	1	0

表1は英語母語話者と日本語母語話者が初対面会話の中で何をこころがけているかを示した表である。項目はすべて回答者が自発的に述べたものから選んだ。この表から推測されることは、日本語母語話者は他の参加者に負担を感じさせないための配慮を示す傾向を見せたが、英語母語話者は他の参加者の会話への参加のしやすさに配慮を示していると言えよう。また、英語母語話者は、話し手自身が能動的にどのように振る舞うか、特に「自分を知的に見せたい」ということをこころがけている様子がみとれる。日本の回答者で、このような回答をしたものはいない。この傾向は、会話の中で質問をするか否かに関する対照的な回答にも関連づけられる。日本語母語話者の回答に、「質問をしない」と答えたものが4人いたが、この中には「質問を不快と思う人がいるため質問しない」「わからないことがあっても質問しない」と理由を述べた者も含まれている。これは他の参加者への負担軽減の配慮と言える。一方、英語母語話者（アメリカ・オーストラリアの回答）では、4名が「たくさん質問をする」と回答していた。これは知的関心があることも示していると言えよう。

表2は、こころがける項目の中でも、ターン・テイキングに関連する回答は英語母語話者から多く見られた。オーストラリアの被験者からの回答が多いので、フォローアップ・インタビューの中で会話方法が特に話題とされた可能性もあり、調査方法には今後の課題が残るが。しかし、「話す量・ターンの回数が同じになるようにする」はイギリスの回答者も、また、「会話の中に、どこで口をはさむか (jump in) を考える」は、アメリカの参加者も述べている。日本の参加者は「誰も話さない場合は自分から話す」というやや消極的な回答である。また、参加者が同じよ

うに話すためになんらかの方策を用いるという回答は日本語母語話者からはなかったが、後にみるように（4.3.）、会話の発言権の不均衡にたいしては、好ましく思っていない参加者もいることがわかる。

表2 会話の中でところがけくターン・テイキングと発話量>

(単位 人)

項目	英	米	豪	日
話す量・ターンの回数と同じになるようにする	1	0	7	0
他の人が話さない場合は、自分が話す	0	0	4	3
だまっている人がいたら会話に入れるように工夫する	0	0	5	0
会話では普段から聞き役である	2	0	0	2
会話中に、どこで口をはさむか (jump in) を考える	0	2	1	0
話題が途切れないようにする	0	0	1	1

4. 2. 話題

初対面会話での話題については、話題そのものを述べた回答、話題にしないものをあげた回答、また、「話題の選び方」について述べたものがあった。この3つを分けて表にまとめた。

表3を見ると、イギリスの参加者のあげた初対面会話の話題が多岐（13種類）にわたることがわかる。個人のバックグラウンドを話題にすると回答したイギリスやアメリカの回答者がいるが、おそらく、出身地、出身大学、居住地、家族も含まれるだろうが、回答者の用いた表現に従った。この中では、仕事内容、職業に関することは、どの国別のグループにもあてはまるようだ。さらに厳密な調査は必要であるが、初対面会話の話題の範囲や種類の差は、会話への貢献のしやすさ、しにくさにもかかわっており、英語力の範疇をこえた知識が必要とされることが言えるだろう。

収録された会話に出てくる話題と、フォローアップ・インタビューであげられた話題は必ずしも一致していない。また、実際の会話データを見ると、英語母語話者のほうは会話参加者全員が参加できる会話を選び、日本語母語話者は1人が他の参加者に語るような会話が多い傾向もある（津田他 印刷中参照）。

表3 初対面会話で話す話題

(単位 人)

話題の項目	英	米	豪	日	話題の項目	英	米	豪	日
職業・仕事・バイト	7	1	3	2	地元・居住地	2	1	0	0
スポーツ・フットボール	7	3	0	0	休みの日の活動	3	0	0	0
研究内容・勉強	2	2	2	2	家族・子ども	2	0	1	0
出身地（地理・歴史も含む）	4	3	0	0	出身大学	2	0	0	0
政治	3	2	0	0	テレビ番組	2	0	0	0
個人の background	2	3	0	0	サークル活動	0	0	0	2
専門知識（趣味の領域も含む）	2	0	1	0					

表4は「話題にしないもの」を示している。個人のバックグラウンドに関しては、表3と表4の両方の話題に出ている。また、オーストラリアの回答には、既婚・未婚・ガールフレンドの有無を話題にしないと述べたものがあった。実際の会話では、オーストラリアの会話で大学院生のうちの一人が結婚していることを明かしたり、ガールフレンドについて尋ねあうという場面があったため、ふつうは言わない話題だったなどの反省のような形として、直前の会話に影響を受けた回答であった。

表4 話題にしないもの (単位 人)

話題にしない項目	英	米	豪	日
個人のバックグラウンド	2	1	2	1
他の参加者の既婚か未婚か。ガール・フレンドの有無など	0	0	3	0
政治	1	1	0	0
宗教	1	1	0	0

表5は、特定の話題ではないが、英語母語話者は比較的、話題をどのようにするか具体的な会話の進め方を考えていることがわかる。表3、4、5を通じて、日本語母語話者の回答が少ないことから、日本語母語話者間では特に話題に対して意図的に共有しているものはなく、初対面会話というジャンルについて何か特徴のある構造も持ち合わせていないようにも考えられる。

表5 話題についてそのほかの回答 (単位 人)

項目	英	米	豪	日
共通する話題	2	0	5	0
話題に変化をつける	1	2	0	0
話題をあらかじめ決めている	0	2	0	0
他の参加者の話題を聞いてから考えた話題	0	0	2	0

4. 3. 楽しめる会話・楽しめない会話

楽しめる会話に関しては、英語母語話者でも国別の偏りはあるが、「新しい知識を得られる会話」「1つの話題が深くまで掘り下げられる会話」「知的な人がいる会話」などがあげられ、会話に知的さを求めるという共通の価値観があるようである。一方、日本語母語話者は楽しめる会話について英語母語話者と共有しているものがないだけでなく、「質問されない会話」をあげた参加者が1人だけで、それ以外に、楽しめる会話に言及した参加者はいなかった。

しかし、日本語母語話者は楽しめない会話の特徴は英語母語話者より多くあげている。英語圏の話者は1人だけの回答の項目も含め4人だけしか言及していない。日本語母語話者は表にあげていないキーワードを含め13名がなんらかの回答を行っている。表にあげてある以外でも、「自分に対して反対意見を言われる会話」「自分と異なった常識をもつ人がいる会話」「聞き役の人ば

かりがいる会話」「一方的に話す人がいる会話」などがあげられている。英語母語話者では、異なる考えの人との会話も受け入れている印象が、4.3節からも見受けられたが、日本語母語話者はあまり自分と異なった考えの人と話すことが苦手とも言える。また、「一方的に話す」「聞き役の人ばかりいる」というのは、4.1節でもみたように、英語圏ではそのようにならないように、会話中に配慮するのに対し、日本語母語話者は相手にあわせる自分で全体の発話量を調節する方策をとらないとも言える。

表6 楽しめる会話

(単位 人)

楽しめる会話の特徴	英	米	豪	日
自分の知らない話題が出てくる会話・新しい知識を得られる会話	4	0	3	0
1つの話題が深くまで掘り下げられる会話	1	3	0	0
知的な人がいる会話	0	3	0	0
異業種の人との会話	2	0	0	0
自分の意見や考えをしっかりと持っている人との会話	0	2	0	0

表7 楽しめない会話の特徴

(単位 人)

楽しめない会話の特徴	英	米	豪	日
自分に対して質問される会話	0	0	0	2
自分の話を理解しようとしめない人との会話	0	0	0	2
沈黙のある会話	0	0	2	0
初対面の会話	1	0	0	1

以上、4節では、回答を分類し、英語母語話者と日本語母語話者が初対面会話をどのようにとらえているかを、インタビューの回答をまとめた。英語母語話者と日本語母語話者に共通するものが少ないこと、特に、日本語母語話者は会話というジャンルについて、何か具体的なイメージを持っていないことが見て取れる。

5. フォローアップ・インタビューからの示唆

以上、フォローアップ・インタビューから得られた項目から日本語母語話者・英語母語話者が会話に対してどのようなイメージを持っているのかを比較した。インタビュー方法の計画が不十分で、得られた数も少なくそのままの数値を比べただけであるが、日本語母語話者と英語母語話者の成人男性が、会話についてどのように考えているか、また、その考えにどのような異なりがあるか概要はつかめたのではないと思われる。以下に、この結果をふまえ、今後の研究への示唆を列挙する。

1) 会話の対照研究では、会話の流れを質的に分析することによって、帰納的に結論を得ようとする研究が多いが、フォローアップ・インタビューで出てきた項目をもとに、それらの規範や期

待が会話の中でどのように実践されたり、表出されたりしているのか、演繹的な分析も可能になるだろう。

2) インタビューの回答が口頭の自由回答であることから、質問紙調査よりもさまざまな項目が出てきたと考えられる。調査者があらかじめ予想していなかったものも多くあった。今後、量的調査や他の調査をするときに、これらをキーワードとして活用できるだろう。そのためにも、精緻な意識調査は必要である。

3) イギリス英語、アメリカ英語、オーストラリア英語の違いは、発音や語彙の観点で注目されていることが多いが、会話の振る舞いもそれぞれ異なることがキーワードから予想される。今後さらに精査が必要であるが、語用論からの視点での比較も今後の課題である。

4) 英語母語話者の回答の共通点から、英語文化のコアの部分が存在することがうかがえる。日本の英語学習者が英語母語話者と同等の英語の会話力をつけるために、どのような能力が必要なのか、どのように会話では振る舞うべきかが回答には示されていると言えるだろう。語彙や発音やリスニング能力だけではなく、たとえば、質問を多く言うこと、他の参加者と同じくらい発言すること、能力を示し知的に見えるようにすること、さまざまな話題に深く対応できるようにすることなどは、英語力だけの問題ではない。厳密な会話の意識調査が望まれる。

5) 英語母語話者は知的な人と会話で新しい知識を得たいという前提で会話をしているのに対し、日本語母語話者は相手に合わせた会話の参加の仕方を重視し、わからなくても質問もしないという態度をとる傾向があるようである。収集した会話データの中にいくつか異文化会話が含まれているが、そのフォローアップ・インタビューでは日本語母語話者は「楽しかった」という感想を述べているのに対し、英語母語話者からは「楽しくなかった」「この日本人とは親しくなれない」という正反対のコメントがあげられている会話がいくつかあった。会話の意識調査をより精密に行えば、日本語母語話者と英語母語話者が異なるスキーマで会話を行っている傾向が、満足度に影響するという裏づけにもなるだろう。また、英語教育では、日本語の会話でふだん行っていることをそのまま英語におきかえただけでは不十分であることを学習者に認識させることも必要である（他の言語教育でもいえるだろう）。会話に対する意識調査から、文化・社会的背景が異なると会話に対する認識がどのように異なるか、学習者はそれに対してどのようにすべきか、また、リンガフランカとして英語を使う場合はどのようにふるまうべきなのか、異文化間会話のスキルの指導に対してもなんらかの提言できるだろう。

6) フォローアップ・インタビューより、英語母語話者にとって初対面会話は日常的に経験する場面であると回答している者が多かったが、日本語母語話者にとっては、非日常的な場面設定であったことがわかった。また、被験者の日本語母語話者の中には、ふだんからあまり会話をする機会がないと言っている者もいた。グローバル化が進み、さまざまな人と接する機会が増えるようになれば、異文化スキルを身につけるためには、言語活動全体に意識をもたせる指導法の検討も考慮することも課題であることが言えよう。

参考文献

- 津田早苗、村田泰美、岩田祐子、大塚容子、重光由加、大谷麻美（2013）『『国際語としての英語の語用指標解明と英語教育への応用—英語会話ができる日本人の育成』平成 22・23・24 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号 22520595）（研究代表 津田早苗）研究成果発表会 資料』2013 年 3 月 2 日 於 東京工芸大学
- 津田早苗、村田泰美、大谷麻美、岩田祐子、重光由加、大塚容子（印刷中）『日・英語談話スタイルの対照研究—英語コミュニケーション教育への応用』ひつじ書房